

明星学園では、次のような支援をポジティブメッセージシャワーと称しています。

【エピソード1】

A男さんが、昼食時から所在不明である。田んぼの水を抜いたり、農業用水の水門を開けたり、重機や車に乗り込んだり、そんなことが大好きな彼であるので、事故が起きる前に保護しなくてはと、施設を上げての懸命の捜索が行なわれた。発見は夜も更けて22時過ぎ、さすがにお腹が空いたのだろう、施設より3キロほど離れた肉屋さんに、ジュースを拝借しに入ったところ、その行動に知的障害がある方なので、心当たりがあったご主人が施設に通報してくれて、無事保護されたのだった。足取りは、何本かの地域からの通報で、次第に明らかになっていくのだが、徒歩で施設から10キロほど離れたところまで行き、その付近で疲れたんだろう、自転車を手に入れて、施設の方へ戻り始めたようだ。しかし、いかんせん、A男さんには帰り道が正確にはわからない。懸命に戻ろうとしたのだろうが(「しまった!早く戻らないと叱られる」と思っていたに違いない)、次第に暗くもなり、困った果てに飛び込んだのが、肉屋さんだったというわけだ。

職員に出された支援の指示は、①施設を飛び出したことを絶対叱ってはいけない、②顔を見たら「よく帰って来たねえ、一生懸命戻ろうとしたんでしょ、道が分からなくなっちゃったんだよね。みんなすごく心配したんだよ、帰ってきて嬉しいよ」と伝えること、③「何かイヤなことがあって飛び出したんだよね。A男さんが悪いのではないよ。気が付かない職員が悪いんだからね」と伝えること、この3点である。

【エピソード2】

B男さんが職員に話しかけたのに返事をしなかったという理由で、その職員の車のフロントガラスを割った。夜中のことである。数ヶ月前には、コーラをおごってくれなかったという理由で、やはりその職員の車をボコボコにしている。

「B男さん、今日は怒らないよ。親にも言ったり、呼んだりしない。だからお父さんに怒られる心配はしなくていい。車の修理代は、あなたの入っている保険が補償してくれるからそれも心配しなくていい。ただいつか、N男さんには、車のガラスを割らない人になって欲しいんだ。でもそれをかなえることは、N男さん一人では難しいことで、クラスの職員や、園長の助けがいる。僕らも一生懸命やる、だからあなたも一生懸命にやる、そうすればいつか気がついたら、そういえば、最近車のガラスを割ってないなあという日が絶対来る。一緒にやってみよう、いい?」B男さんからは「ああ」と返答が返った。

【解説】

イギリス自閉症会が発表している自閉症支援の骨格を示している概念に【SPELL】がある。S-Structure(構造化)から始まる支援の5本柱のPはPositive approaches & expectations(肯定的な係わりと期待)である。これを実践するためには、ネガティブな行動と思われるものでさえも、肯定的に捉え直すという支援職員の心構えが必要である。例えば「おとなしい、自己主張が少ない人」を「何でも我慢することができる人、自分よりも回りを大切にできる人」と捉えなおすことができる支援力である。たとえ小さくても、この積み重ねが、自分を変え、必ず相手を変えていきます。